

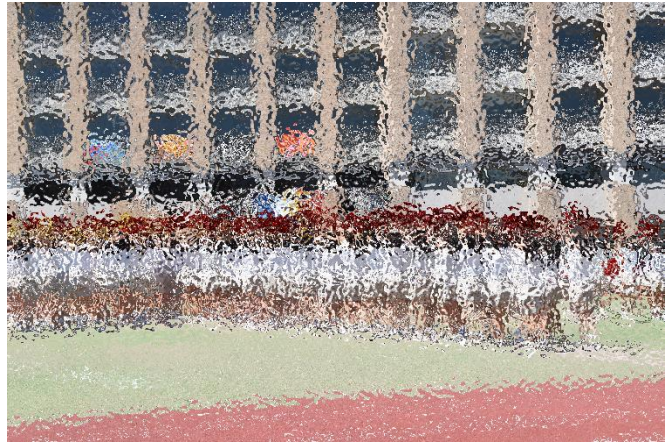
中2から見た体育祭

去る4月28日、清々しい気候のなか体育祭が行われました。

中学2年生にとっては、2回目の体育祭です。競技では玉入れとムカデ競走に取り組みました。何も分からなかった中学1年生の頃に比べ、チームの優勝に向けて練習にいっそう熱が入っていました。

校歌にあわせた集団演技は毎年の中学2年生の登竜門です。学年全員が一致団結して行うダンスは、洗足生なら誰でも踊れる共通体験のひとつとなっています。

また、応援団や吹奏楽部の一員として迎えた初めての年でもありました。充実した経験を積んだ生徒たちは、来年からは審判や記録などといった運営の一翼を担っていくことになります。



生徒たちの感想を一部紹介します。

とうとう1年が経った。1年前の私は、まだほやほやの中1で、板に付かない制服を着て、たくさんの慣れていないことに驚いていた。そんな初めての体育祭は、今でもよく覚えている。初めての行事で、とても緊張していたなかで目の当たりにした先輩方の姿は、とてもまぶしかった。私は、その時に、入学してから初めて「あんな先輩になりたい」と思ったのだ。

しかし、集団演技はあまり気が進まなかった。校歌に合わせて踊る洗足ダンスより、高2の先輩の踊りの方がずっと素敵だと思っていた。でも、洗足ダンスは私の思っていた以上のものだった。240人を1つにするのはとても大変なことだ。しかし、240人が1つになるのは意外とできるのだ。「1つにする」のと「1つになる」のは違う。「1つにする」というのは、一人一人がそれぞれのしたいことをしている中で、誰かが同じ行動をさせようとする。それに対し、「1つになる」ということは、一人一人が周りの様子をきちんと見て、自分のしたいことをおさえ、ぴったりと重なり合うこと。つまり、「1つになる」ということは、一方的ではなく、全員が全員のことを考えていることなのだ。それを学べたのは、今回の洗足ダンスのおかげだ。練習中、1つになれていない時が沢山あった。それを、「1つにな

る」とはどういうことか考え、実行できた。それは、きっと去年の私たちにはできなかったと思う。洗足ダンスは、1年間を過ごした私たちへの挑戦状でもあり、成長へのきっかけだったのだと思う。これからはたくさんの課題にぶつかって、1年前の自分や昨日の自分より成長した自分になりたいと思った。
(Y. S.)

私は今年青組応援団に入った。一言で言うと応援団はとても楽しかった。

それは何事も本気でやれば楽しいと感じるからだとは私は考えた。私が応援団をやって一番大変だったことは、応援団ではない中学2年の人たちを本気にさせることだった。最初に行進の練習をした。新しく入ってきた中学1年の人たちよりも断然声が小さかった。私たちが何度注意をしたところで声の小ささは変わらなかった。私達は本当に勝ちたいと思っていたし行進などの応援も得点につながるため、少し厳しい口調で注意することも多くあった。でも私は今そのことを後悔している。大きな声をだすのを面倒に思う人からすれば、なんで厳しく注意されるのか分からなかったと思う。まず大きな声を出して！という前にみんなをやる気にさせることが一番大切なんだと気づいた。本気になってやればどんなに順位が悪くても楽しいということをみんなにも分かってほしかった。最後まで本気がでなかった人たちは勝っても負けても楽しくはなかったと私は思う。だから私は来年の体育祭ではみんなを本気にさせることから始めようと思っている。

そして私がなぜ今年の体育祭で本気になれたかということ、先輩方のおかげだと思う。まず応援団の先輩方だ。先輩方は勝ちたいという気持ちをまっすぐもって私達を最後まで指導してくださった。その姿勢はとてもかっこよく、私もそんな先輩になりたいと思った。そしてもうひとり、名前は分からないが門を作ったりポンポンを作ったりしていた先輩にも憧れた。その先輩は毎朝、放課後、一人でもくもくと作成を続けていた。私にはこうやって陰ながら本気で頑張る姿がとても輝いて見えた。私はそんなかっこいい先輩に囲まれていて幸せだと思った。そして来年こそはみんなを本気にさせ、優勝に貢献できるようにしたい。(H. F.)

